

加藤 義夫(キュレーター/美術評論)による評論

yukoh の作品理念の根底には、民族信仰や自然信仰を基盤とした日本固有の宗教である「神道」の影響が大きい。古来、日本人は山や海、草木や巨石といった万物に魂が宿ると信じ「八百万の神」とし、自然の恵みに感謝し、自分が生まれた土地の神様や先祖の霊をもてなし 祀ってきた。「神道」には、このような「精霊崇拜」と、亡くなった人を神として 祀る「祖霊信仰」のふたつの理念から成立している。

「キリスト教」社会を形成するイタリアでは、理解しにくいかもしれないが、日本の「神道」は森羅万象に神が宿るとする多神教世界であり、「キリスト教」文化 圏は一神教の世界観でその違いは歴然であろう。「八百万の神」という価値観の多様性に富んだ「神道」と唯一神の「キリスト教」には大きな隔たりがある。歴史的には、気候や風土や地理的環境によって、そこに住む人々の自然観や世界観に違いが生まれたといえる。イタリアと日本の自然や風土や宗教の違いは、自然観や精神的風土の違いを生み、芸術表現にも差異を示すことになった。

その「神道」に興味を持つ yukoh の絵画は、自然から取材した樹木や小鳥などの 写真をベースに胡粉や鉛筆、パステルで描かれる。または枯れ枝や羽毛なども使われる。作品のサイズはいずれも小振りであるが、その小さな画面の中で、自然の精霊たちが大きく飛びかい幻想的な世界と物語が生まれ繰り広げられる。「神道」と「仏教」が交じり合う「神仏習合」という両者の相互補完は、仏教伝来以降、約 1500 年に渡り、日本人の精神の礎である。その精神が現在も生きているという証しが、yukoh の作品から見てとれる。Yukoh は、日本の伝統的な「神仏習合」というハイブリッドな宗教的世界観を現代に活かし、芸術表現としている美術家 といえよう。

ハイブリッドな宗教的世界観を現代に活かす」加藤 義夫(キュレーター/美術評論)